

与謝野鉄幹と漢詩

—『満蒙遊記』付「満蒙遊草」の漢詩—

(一) —

西村 富美子

与謝野鉄幹は妻の晶子とともに、昭和三年(1928)五月上旬、正確には五日から、六月中旬、正確には六月十七日にかけて、南満州鉄道の招聘を受けて中国を旅行している。鉄幹五十五歳、晶子五十歳のときのことである。^(註1)

鉄幹晶子夫妻にとって十七年ぶり、二度目の外遊であるが、最初のヨーロッパ旅行とは内容も目的も全く異なっており、南満州鉄道お抱えの大名旅行であり、最初から晶子と同行の旅であった。また旅行の目的も、

「満鉄本社は我我を招いて、満蒙の晩春初夏を観て歩かせ、氣に入った所で歌を詠めと云ふのである。こんなに愉快な旅行は生涯に幾回もあらうとは想はれない。我我は本社の諸友の厚意を満喫しよう。」(『満蒙遊記』「出発と船中」)

と述べるように、経済的な心配は全く無く、与謝野夫妻の本業である歌を詠むのが仕事、という恵まれた旅であった。

東京出発から計四十四日間の二人の旅であったが、実際の中国滞在期間は、東京から神戸を経て門司港での乗船までの四日間、大連から帰国した神戸・京都・東京の自宅までの六日間、の計十日間を除けば、およそ三十四日間であった。

この満州・蒙古方面への旅行のことは、二年後の「昭和五年五月」に、

『満蒙遊記』 与謝野寛、晶子 合著

と題して、大阪屋号書店から出版している。旅行中の内容は、すでに旅行中に「横浜貿易新聞」等に連載をしている。^(註2)

予定の訪問地は、当初「満蒙と北京」であったが、中国の国内事情の変化で北京へは行けず、実際には、旧満州(東北三省：黒竜江・吉林・遼寧の各省)と蒙古(内蒙古)であったが、内蒙古の方も現在の内蒙古自治区ではなく旧内蒙古であり、現中国では吉林省に属する地区であった。本稿では旅行後の著書『満蒙遊記』を基本資料とした。

先ず簡単にこの書の内容につき述べておくことにしたい。本書は次のような構成になっている。

項目名 執筆者 頁

満蒙遊記の初めに 寛 一〇四

目次

出発と船中 寛 一〇五

大連雑記 寛 五〇四

金州以北の記 晶子 四二〇

南山・金州・熊岳城・営口・大石橋・湯崗子と千山・遼陽・安奉線車上・安東・五龍背温泉・奉天駅の印象・四平街へ・四平街・内蒙古を行く・洮南・洮昂線車中・昂昂溪駅・齐齐哈尔・嫩江の

一夜・昂昂溪の宿・東支那鉄道車中・哈爾濱の五日・長春へ・吉林・再び長春へ・公主嶺・奉天に著く・撫順・奉天の五日・大連と旅順・帰路

満蒙の歌 一 寛 (二三九首) 二二三〜二七三

満蒙の歌 二 晶子 (二二四首) 二七五〜三三〇

満蒙遊草 漢詩 寛 (三七首) 三三三〜三四四

旅行記の大半は晶子の筆によるもので、黒竜江省から遼寧省に到る各地の状況がかなり詳細に述べられ、歌は約四六〇首、漢詩が三七首である。歌は一〇〇〇首から選び、漢詩も実作から選んで、師の吉田増蔵の校閲を経たものだという。

漢詩は三七首であるが、寛の漢詩がこれだけまとまって収録されるのは、この『満蒙遊記』の「満蒙遊草」だけであり、一種の小漢詩集の体裁を成している。本稿ではこの中に収録された漢詩を対象に述べるのが目的である。特に、東蒙古つまり内蒙古の旅を詠んだ漢詩を取りあげて述べることにしたい。

「満蒙遊草」三七首の内容は、日本離陸までの詩が八首(1〜8)、中国旅行中の作が二九首である。次に三七首の詩題を示しておく。

1〜3 戊辰暮春、將伴内子遊滿洲蒙古及北京、與諸友飲、三首

4 將發東京、寄長城堀口九萬一詞兄

5 佐渡渡邊湖畔有約不至、乃有此寄

6 五月五日、發東京向神戸車上有作

7 搭汽船亞米利堅號、發神戸、瀬戸海上所見

8 黄海舟中、與東京、仙臺、福岡、京都四大學諸教授語、賦此以似

9 觀大連埠頭苦力等所飼「百靈」有感、賦此似大連諸友

10 旅順

11 登千山、宿大安寺

与謝野鉄幹と漢詩

其二、用朱子月夜述懷韵

遼陽

微雨中泛鴨綠江、望統軍亭及九連城

東蒙古途上、寄東京諸友

赴洮南車上作

洮南投大通旅館、館係邦人所營。此地排日氣勢太熾、邦人婦女小兒、皆避難他方、而其留者入夜輒閉戸不出。立名森君、適與予同宿、始納交於君。君本知予名、又善國風。

面鹹(面鹹漢語、西人所謂曹達也)

自昂昂溪、赴齊齊哈爾城車上。

與黑龍江省督軍吳俊陞夫人李氏、聯車遊城外。將軍劉得權君夫妻泛船嫩江、又張宴水莊。席上劉君詩先成、乃和以酬、五首

哈爾濱驛頭、弔伊藤博文公遭難遺迹

哈爾濱公園

哈爾濱客中、呈古澤幸吉先生

哈爾濱雜詩二首

柳絮(於長春客舍作)

吉林(吉林即古肅慎地)

奉天北陵

奉天、遇大元帥張作霖爆死之變、賦此似諸友

奉天客舍作

再向大連車中二首

再過旅順

次いで、三七首の各詩の作詩日時・詩型・地点(各省等)を記しておく。

1 日時 詩型 諸友と飲む 地点 東京

五月

五律

諸友と飲む

東京

与謝野鉄幹と漢詩

29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2
五月二九日	五月二九日	五月二九日	五月二七日	々	々	々	々	々	五月二六日	五月二六日	五月二八日	五月二五日	五月二五日	五月二四日	五月三日	五月二日	々	五月一八日	五月二日	五月九日	五月七日	五月六日	五月五日	々	五月	々	々
七律	七律	七絶	七絶	七律	七律	七絶	七絶	七絶	五古	五律	五古	五古	雜言体	七絶	五律	五律	五律	五古	七律	五古	七律	七絶	七絶	七古	七絶	五律	五律
哈爾賓	哈爾賓	哈爾賓 (呈古澤幸吉)	哈爾賓公園	哈爾賓駅	々	々	々	々	嫩江の船上	昂昂溪へ齊齊哈爾車中	面鹹	洮南大通旅館	洮南への車中	東蒙古途上	鴨緑江上	遼陽	朱子の詩に次韻	千山に登り・大安寺に宿す	旅順・爾靈山下	大連埠頭	黄海船上	神戸出航・亜米利堅号船中	東京から神戸への車中	東京出発	々	々	々
々	々	々	々	々	々	々	々	々	々	黒竜江省	遼寧省	々	々	吉林省	々	々	々	々	々	遼寧省	遼寧省	々	々	々	々	々	々

30	31	32	33	34	35	36	37
五月三一日	六月一日	六月七日	六月四日	六月六日	六月八日	々	六月九日
七古	五律	五古	七古	五律	七絶	七絶	七律
長春(柳絮)	吉林	奉天北陵	奉天(張作霖爆死事件)	奉天客舎	大連への車中	々	旅順
吉林省	々	遼寧省	々	々	々	々	々

※遼寧省滞在が最長。遼寧省が中国旅行の出発地点、最終地点であったため、旅の道程が大連から北上して再び大連に南下したことによる。大連港で亜米利堅号に下船・乗船している。

今回の主な対象となる詩は、前に挙げた三七首の詩の、15・16・17・18の詩である。順次詩を挙げて、解説とともに問題点を指摘して論を進めていきたい。なお訓読は西村が付したものである。

先ず初めは、15の詩である。

東蒙古途上寄東京諸友

東蒙古への途上にて、東京の諸友に寄す

五月東蒙春未加 五月の東蒙 春未だ加わらず

黄埃十丈日車斜 黄埃十丈 日車斜めなり

遊人始識龍沙路 遊人 始めて識る 龍沙の路

不似神京踏落花 神京の落花を踏むに似ず

☆東蒙：内蒙古と同じ意。 ☆黄埃：黄砂による砂埃。 日車：太陽。 ☆龍沙：辺境の地。 ここでは内蒙古をさす。 ☆神京：東京をいう。「滿蒙遊草」に「佐渡の渡邊湖畔」に贈った七言六句の詩(5)があり、その詩の末句に「龍沙落日燕京の花」と見える。「燕京」は「北京」を指している。五月なのに内蒙古の春の訪れの

遅いの比して、日本の東京ではすでに落花の時節であり、まったく季節の状況が異なることを表現している。

次いで、16の詩であるが、この詩には幾つかの問題点がある。

赴洮南車上作

洮南に赴く車上の作

左提一詩婦

左に一詩婦を提え

右挈兩詩友

右に兩詩友を挈り

四人萬里遊

四人 萬里に遊ぶ

古孰得似否

古え孰に似ずを得るや否や

上車如在家

車に上ること 家に在るが如し

對坐把毫賦

對坐し 毫を把りて賦す

路入東蒙沙連天

路は東蒙に入りて 沙は天に連なる

風捲黃埃暗于霧

風は黃埃を捲きて 霧よりも暗し

車窗忽望土城明

車窓 忽ち望む土城の明らかなるを

夕陽照出洮南府

夕陽 照出す 洮南の府

☆一詩婦：晶子のこと。 ☆兩詩友：加藤郁哉・佐藤惣之介のこと。

加藤郁哉は、滿鉄本社營業課の社員。「旅行記」には

「滿鉄が有する唯一の青年文人で、また実務家である。東京外国語学校を出て露語を善くし、露西亜最近の文学に専門家以上の造詣があると云はれ、詩と俳句に於て最も新しい傾向の作者である。滿鉄本社の宇佐美君が特に予等の滿蒙旅行のために、君を煩わして東道的主人たらしめられたのは、その用意の深いのに感謝される。」

と紹介し、与謝野夫妻の滿蒙旅行の全行程の案内役として行を共にした。

最後の大連の五日滞在にも

与謝野鉄幹と漢詩

「また他の一日（六月十日）は、西田、加藤、渡邊諸氏に、四平街から来られた森立名さんを加へて、大和ホテルの一室で短歌会を開いた。」

また

「かくして大連に五泊し、十二日に往路と同じアメリカ丸に乗って帰途に就いた。中に宇佐美、小日山、石川三夫人と、滿蒙の旅行を共にした加藤郁哉さん、前後の大連滞在に兄弟の如く深切にお世話を下さった西田猪之輔さんとに、特に別れが惜しまれた。」

との記述があることから、約三十日間にわたって與謝野夫妻と行動を共にしたことが分かる。

「兩詩友」のもう一人は佐藤惣之介である。彼は、詩人また俳人、與謝野夫妻に遅れて東京から訪中し、大連、金州を経て夫妻の後を追って内蒙古への旅に加わった。

☆洮南：現在は吉林省白城市に属する。かつては吉林省哲理木盟に属していた。与謝野夫妻が訪中した昭和三年（1928）ごろの内蒙古圈がどうであったか、筆者は寡聞にして不明なのだが、「旅行記」には「外蒙古・内蒙古」についての実に詳細な記述があり、旅行以前に蒙古関係の書物を読んだり調べたりしていたのではないだろうか。ただ記述の内容は現在の内蒙古の状況とは合致せず再検証の必要があり、与謝野夫妻の旅は、旧滿州・内蒙古の旅ではなく厳密には東北三省の旅というべきかも知れない。

☆この詩の内容は、「旅行記」（五月二十五日）の四平街から東蒙に向かう車中の情景の描写と一致する。

「午後私達は、沙地ばかりに面する单调な車窓の展望にも倦いて、各自が手帖を出して歌を（佐藤さんは俳句を）作って居たが、三時三十分に今日の目的地の洮南へ着いた。著く時に加藤さんから注意されて、車窓の左の前方に洮南城を望んだが、これまでに見

与謝野鉄幹と漢詩

た金州、熊岳城、遼陽などの城市と違ひ、洮南は城壁も家屋も全く一様の灰色をして居る。沙漠の上に沙を盛り上げ、それを三十町四方の方形に固めた土城だからである。折柄夕日が城壁の一方を照らしてゐたので城に近づいたことを知ったが、曇った日には沙と土城との区別が付かず、敵に対して自然のカンフラアジュ（色彩錯迷）が施されてゐることであろう。荒漠たる平沙の上に一本の樹木の点景さへ持たぬ灰白色の城、それが古代の廢城でもあることか、最近に築かれた繁華な新城なのである。千山に登つて以来、歌の外に漢詩をも作つてゐる良人は、この時の感想を次の一篇に現すのであった。

……詩……

と記述する。同行者は与謝野夫妻、佐藤氏、加藤氏、それぞれが歌や俳句を作っている。夕日に照らされた洮南城の土城の状況は、寛の漢詩と全く同じであり、「滿蒙遊草」とほぼ同じ詩がここにも全文記されている。その詩は

萬里相携遊。兩友一詩婦。上車如在家。對坐把毫賦。路入東蒙沙連天。風捲黃埃暗于霧。車窓忽望土城明。斜陽照出洮南府。

という五言四句・七言四句（計八句）の雜言体である。先に挙げた「滿蒙遊草」の「洮南に赴く車上の作」が五言六句・七言四句（計十句）であるのとは、五言の句数が異なる。七言四句は末句の「夕陽」と「斜陽」の異同のみだが、大きく異なるのは、「滿蒙遊草」の初めの四句と「旅行記」の初めの二句である。

この詩はまだ他にも残っており、寛がこの滿蒙旅行の車中で作った原詩ではないかと考えられるものが存在する。それは次に挙げる堺市博物館蔵の「鉄幹漢詩草稿」の一枚である。^{注1}

東蒙雜詩之一

東蒙雜詩の一

萬里相携遊 萬里 相携えて遊ぶ

兩友一詩婦 兩友 一詩婦

上車如在家 車に上ること家に在るが如し

對坐把筆賦 對坐し筆を把りて賦す

路入東蒙沙連天 路は東蒙に入りて 沙は天に連なる

風捲黃埃暗于霧 風は黃埃を捲きて 霧よりも暗し

車窓忽望土城明 車窓 忽ち望む 土城の明らかなるを

夕陽照出洮南府 夕陽 照出す 洮南の府

この「鉄幹漢詩草稿」一枚には、次の五言律詩がもう一首書写されている。

宿千山大安寺 用朱子月夜述懷韻

清徹上峰氣、不許客衣單、童子晚吹火、煙颺松樹間、自笑平生語、漫然誇素寒、願求詩骨瘦、抱卷住千山、

寛

乞古沢先生大政

「東蒙雜誌之一」及び「千山大安寺、用朱子月夜述懷韻」の二首で一枚であり、紙末に「寛」の署名と「古澤先生の大政を乞う」の一文が添えられている。なお「千山」の詩は「滿蒙遊草」（11）に収録されている。

大政を乞うた古澤先生とは古澤幸吉のことであり、東京外国語学校ロシア語科出身、外交官としてロシアに勤務、退官後はハルビンに在住し滿鉄公所長兼在留日本人会会長。漢詩や俳句の作者であり、今回の與謝野夫妻の滿蒙旅行は古澤幸吉の尽力によるものであった。漢詩に堪能な古澤幸吉に添削を乞うたのだが、この寛自筆の「漢詩稿」には、寛自身の修正加筆の跡はあるが古澤幸吉の添削の跡は無い。

ちなみに「滿蒙遊草」には、寛が古澤幸吉に呈した七言絶句一首が

収録されている。^{注5}

以上述べたように、この詩には三種の詩稿が存在することになる。

作詩の時期の前後からいえば、

1 堺市博物館蔵漢詩稿

2 「満蒙遊記」の記載詩

3 「満蒙遊草」の記載詩

となる。1と2は、末句の「夕陽」「斜陽」以外は、詩型も全く同じである。おそらく1及び2がこの詩の原型であり、3は寛が「満蒙遊草」の閲読を乞うた師の吉田学軒が修正加筆したものではないかと筆者は考えている。ただし前半六句の第四句は解説困難であり疑問が残る。これには吉田学軒の朱筆による修正加筆の詩稿が無いので未解決である。

次に17の詩である。

洮南投大通旅館、係邦人所營。此地排日氣勢太熾、邦人婦女小兒、皆避難他方、而其留者入夜輒閉戸不出。立名森君、適與予同宿、始納交於君。君本知予名、又善國風

洮南にて大通旅館に投ず、館は邦人の営む所に係る。此の地は排日の氣勢太だ熾んにして、邦人の婦女小兒、皆な他方に避難し、而して其の留まる者も夜に入れば輒ち戸を閉じて出でず。

立名・森君、適たま予と同宿し、始めて交を君と納む。君本予が名を知る。又た国風を善くせり。

洮南蒙古境 行旅太艱辛

洮南は蒙古の境、行旅太だ艱辛。

驕卒漫遮路 健癸吠向人

驕卒漫に路を遮る、健癸 人に向かいて吠ゆ。

墟荒今憶昔 草短夏猶春

墟は荒れて 今 昔を憶う、草は短くして 夏も猶お春のごとし。

与謝野鉄幹と漢詩

霜白朔邊土①風黃沙漠塵

霜は白し 朔辺の土、風は黄なり 沙漠の塵。

磧中忽聽銃 車上欲廻輪

磧中 忽ち銃を聴き、車輪を廻さんと欲す。

朽木存古祀②新城多漢民

朽木 古祀を存し、新城 漢民多し。

翟膠催醉早 羌笛引愁頻

翟膠 醉の早きを催す、羌笛 愁いを引くこと頻りなり。

喜遇同鄉客 唱酬相與親

同郷の客に遇うを喜び、唱酬 相ともに親しむ。

自注①（地は曹達を生じ、白きこと霜に似たり）

②（城中に喜雀の樹有り、胡人之を祀る、今既に朽ちる）

☆森立名：四平街（吉林省）の満鉄販売所の主任。歌人（「国風を善くす」）。「旅行記」には、洮南で宿泊した大通旅館で

「食後に佐藤惣之介さんは加藤さんを促して散歩に出られ、私達は此宿に泊ってゐられる森立名さんとお話をして居た。森さんは四平街の満鉄販売所の主任で、社用のために蒙古の奥地へ出張された帰途に此地へ来て、私達に逢うために今夜の出版を一日延ばされたのであった。以前東京にゐられた頃から歌を詠む人である。お話をして見ると吉井勇さんなどを知ってゐられ、また大連の私達の旧友西田猪之輔さんとも親友である。私達は蒙古の曠野の街で計らずも森さんと泊り合せた事を喜んだ。歌を詠まれると云ふのが何よりも私達を氏に親しませるのであった。森さんから蒙古の生活についてお話を伺つてゐると、…」

の記述や、先に挙げた「大連の五日」の「六月九日」の大和ホテルの短歌会にも西田、加藤、渡邊の諸氏に「四平街から来られた森立名さんを加えて」と名が見えていた。

与謝野鉄幹と漢詩

☆洮南蒙古境：与謝野夫妻が旅行した時代には「洮南」は内蒙古圈内であった。 ☆健策：「旅行記」には、

「私達は人の出入りの最も多い大東門から（洮南）城内の市街に入った。…獐猛な契狗、普通に蒙古犬と称する犬が幾匹も徘徊して異邦人と見れば吠えようとするとする。」

との記述がある。 ☆翟膠：翟は異民族、膠はにがり酒。ここでは「馬乳酒」をいうか。 ☆羌笛：異民族の笛。 ☆同郷客：東京出身の森立名をいう。

最後は19の詩である。

自昂昂溪、赴齊齊哈爾城車上

昂昂溪より、齊齊哈爾城に赴く車上

行盡東蒙路 望中無一樹

行き尽くす東蒙の路、望中 一樹無し。

沙吹天逆升 日與車横度

沙吹きて天逆しまに升起、日は車とともに横に度る。

五月既聽蟲 終年不知露

五月既に蟲を聴き、終年露を知らず。

興安嶺那邊 萬里蒼茫暮

興安嶺は那邊ならん、萬里蒼茫として暮る。

☆興安嶺：黒竜江省の山脈、大・小の嶺が続く。東蒙の旅の終着地昂昂溪に到着である。

齊齊哈爾は黒竜江省の省都である。晶子がかつてこの昂昂溪駅を通過したことがあり、その時のことを回想している。

「私は大正元年の五月に浦鹽斯德から汽車に乗って、二日目の夜明けに此駅を通過して外蒙の満州里に向かった事を思ひ出すのであった。其時は全くの一人旅で、汽車の室内に日本人を見受けな

かった心細さに比べて、今度は同行者があり、殊に満鉄の詩人加藤さんが周到な注意と深切とを以て案内して下され、…」と晶子は記している。前年の十一月に渡欧した寛の後を追って渡欧した時のことである。

○

『滿蒙遊記』また付記された漢詩集「滿蒙遊草」は、歌集・漢詩集としての文学的な価値以外に別の資料としての意味があるのではないだろうか。所謂東北三省といわれる遼寧・吉林・黒竜江省の三省は日本との関係が特に深い地区である。旧満州であったときのこれらの地域がどのような状況であったか、特に庶民の生活がどのようなであったか、その描写はかなり精密なものがある。与謝野夫妻が歌人であるだけに歴史的な旧跡は勿論のことだが、言語に対する興味、好奇心は特殊で、参考になるところが多々あるように思う。漢詩集の「滿蒙遊草」にも読解不可能な点もあるのだが、夫妻の四五〇首ほどの短歌と同じく韻文による旅行記と考えることも可能であろう。筆者はしばらくの間この漢詩集「滿蒙遊草」の読解の試みを続けてみたいと考えている。

『滿蒙遊記』が出版された年は、与謝野夫妻が主宰する新詩社の最後の同人雑誌『冬柏』が創刊された年でもある。『滿蒙遊記』に名が見える人たちの中にも『冬柏』の同人が存在するようである。

【参考】

「旅行記」の中から、古澤幸吉・佐藤惣之介・森立名に関する記述を記しておく。

◆古澤幸吉：

①「出発前に古澤幸吉君はハルビンから、…略…、共に旅行についての注意を与へられ、…三頁

②古沢氏令嬢（早川松江）・文化学院最初の卒業生…四四頁

③哈爾濱の五日…一四九頁

私達は五月二十六日（二七日）の午後八時三十分松花江の鉄橋を

渡って哈爾濱に著いた。驛へは古澤幸吉先生ご夫妻と満鉄公所の岡部正義とが出迎えて居てくださったが、佐藤さんと加藤さんとは北満ホテルに泊られ、私達夫婦は古澤先生が静かな処へ滞在させようと云うご厚意から、巴里ならパッシイとも云うべき高壮な街にある満鉄公館を特に宿所として置いてくださるのであった。公館は露西亞帝政時代の貴族の邸宅であったと聞くだけに、間数の多い立派な露西亞建築である。平生は河野時宗さんと云う若い夫婦が番をしてゐるだけで、その広い所に誰も居ない。驛から案内して来て下さった古澤先生御夫婦は、どの間でも氣楽に使用せよと云われる。私はそのご親切に感激しながら、何となく東京の宅にゐるような心の落ちつきを覚えた。

私は四五年前に一度東京で古澤先生にお目に掛った。古澤夫人とはお手紙の交際はあるが、初めてお目に掛るのである。良人はお二人に対して全くの生面である。先生は早く東京外国語学校の露語科を出られ、外交官として露西亞に久しく在住し、領事を辞せられて後は、多年此地の満鉄公所長及び在留日本人会長として、公私のために貢献されて居ると聞いてゐたが、お目に掛ってお話を伺つて見ると、露西亞文学に精通してゐられると共に、日本文学の愛読者で、新しい作家の小説にまで目を通してゐられるのに驚かされる。また漢詩や新俳句の作者でもある。それからご病身だと聞いてゐた夫人は、瘦せてはゐられるが、近ごろはお達者なやうであるのを私達は喜んだ。優雅と聡明との平衡を得た夫人であるのが直感される。私は宮口へ行って久久お嬢さんにお目に掛ったことを話す中に涙ぐましい気持ちになったが、夫人の目にも涙があった。

.....◆.....

五月二八日夜

今夜は御招待を受けて四人が古澤先生のお宅へ行った。客は八木総領事さんの外に、図書館長の来栖義助氏御夫婦、哈爾濱新聞主事の

与謝野鉄幹と漢詩

佐藤四郎さん達であった。総て氣の置けない人達を古澤先生が紹介して下さったので、芸術的な話が食卓を特に楽しくした。私達は古澤先生が俳句と漢詩を八木総領事さんが邦語の詩を、来栖夫人が短歌を、何れも熱心に作られる事を知るのであった。古澤先生はまた暇を求めては羲之の古法帖に対して筆を染められる相である。...

④五月二九日夜、

今夜は古澤先生御夫婦と公館で結構な日本料理を頂きながら、しめやかに遅くまでお話する事が出来た。私達が此の満蒙旅行を為し得たのは、主として先生と大連の宇佐美完爾さんとの御厚意に由る事であり、哈爾濱の滞在中も御夫婦の細かな御配慮のお蔭で、総べてが他日の好い思出となる事ばかりであるのを私達は感謝するのであった。先生と良人とは同年である。今度お目に掛つた事であるが、先生も良人と同じく二十三歳の時に朝鮮の京城にゐられた。先生は日本公使館に、良人は日本領事館に仮寓して居たので、屢共に顔を見られた筈ながら交際は無かつたのである。それで今夜のお話の中に昔の京城の追憶談がはづんだ。先生は當時の朝鮮公使の三浦、小村両氏に愛せられて其の官邸に住んでゐられたのであり、良人も小村氏を知つて居り、その令息の欽一さんをも久しく先生と共に知つてゐる。今度の旅行にも欽一さんが外務省関係の人人へ紹介状を書いて下さつた程である。食後に四人が欽一さんと高濱虚子先生とへ絵葉書を書くのであった。

⑤翌日

三人は公館で午餐を済ませた後、午後一時半に驛へ出た。古澤先生初め来栖氏御夫婦、満鉄の坂本岡部両氏、佐藤四郎氏と浦崎さんなどが見送つて下さるのであった。

◆佐藤惣之介

①今夜また詩人の佐藤惣之介さんが此処に著かれた。(五月二〇日(日曜)、湯岡子温泉)。私達より遅く東京を発ち、大連と金州とを

与謝野鉄幹と漢詩

見て私達の一行に合せられたのである。明日からの前程に此の若い快活な詩人を加え得たのは嬉しい。

②五月二十四日、奉天。

案内役の加藤郁哉さんも、短時間に満鉄の奉天事務所の人人の意見を湊合して「鄭家屯から通遼へ行くことを断念し、洮南と齊齊哈爾とだけへ行くのなら問題は無からう。とにかく四平街まで行って奥地の様子を確かめよう」と云はれるのであった。詩人の佐藤さんは「蒙古へお伴するのは愉快だなあ」と云って冒険を喜ばれるが、…

③五月二十五日午後、洮南。(四頁下段)

④五月二十九日…一六四頁

今日佐藤惣之介さんが一日先に立って長春へ引返された。

〔注〕

(1) 与謝野寛自作の自伝の「昭和三年」の項に、「五月、晶子と満蒙に遊び、六月に帰る。古澤幸吉・宇佐美寛爾両君の斡旋に由り、南満州鉄道株式会社より招聘せられたるなり。」と記す。

(2) 「旅行記」は、「横浜貿易新報」に、「満洲の旅」と題して、(一)(二十六)まで連載している。短歌は、「大連新聞」「満洲日報」「改造」等に掲載している。

(3) 「大連雑記」(三四頁)

(4) 17及び18の詩について、筆者は「堺市博物館蔵与謝野鉄幹の漢詩の草稿について」(『堺市博物館研究報告』第31号 平成二十四年三月)の中で、紹介と解説を施したが、他の草稿とは料紙の紙質も全く異なり、校閲者古澤幸吉氏の朱筆による添削も全く無いので、恐らく、東蒙古への車中で作った原詩ではないかと推定される。

(5) 哈爾賓客中、呈古澤幸吉先生

哈爾賓の客中に、古沢幸吉先生に呈す

先生白髪未云還

先生 白髪なるも 未だ還らずと云う

留住朔方沙漠間

朔方沙漠の間に留住し

卓落東邦千載策
蒼茫黑水兩厓山

卓落す 東邦 千載の策
蒼茫たり 黑水 兩厓の山